

まちづくり ひろしま

被爆100年(西暦2045年)の姿をめざして

第15号(平成27年1月15日)

読者数：493名(募集中)

メールアドレス：hirosima.idea.c@urban.jp

〒733-0002 広島市西区楠木町1-9-7

発行人：前岡智之、編集人：瀧口信二

配信元：広島アイデアコンペ実行委員会

ご提案・ご意見等は、こちらまで

□巻頭言

清溪川の復活

(チョンゲチョン)

元広島市長
平岡 敬



5年後に東京オリンピックが開かれる。東京電力福島第一原発の事故で、放射性物質の放出と拡散が続き、故郷を追われた被災者の救援と補償が放置されている現状を見ると、とうてい「五輪バンザイ」を叫ぶ気にはなれないが、世の中はいつの間にか「五輪反対」など言い出せない空気が強まっている。

言うまでもなく、オリンピックは良いことづくめではない。1964年の東京オリンピックは、敗戦国日本の復興ぶりを世界に示すイベントであったが、いま思えば、遮二無二進めた都市改造によって、私たちの目の前から消えてしまったもの、失われた風景も少なくない。例えば、交通網整備の犠牲となったのが“お江戸日本橋”の風景である。日本橋には道路元標があり、東京発の道の起点である。その日本橋が、いまは高速道路に覆われて、身をすくめている。昔の日本橋の風景を取り戻そうという動きもあるようだが、そこで思い浮かぶのは韓国ソウルの清溪川(チョンゲチョン)である。

私は中学時代を京城(現ソウル)で過ごした。当時、京城は人口90万人の大都会だった(現在は市域も広がり約1,000万人)。この都市の真ん中を小さな清溪川が東西に流れていた。天気の良い日には、洗濯に精を出す大勢の韓国人女性の姿が見られた。懐かしい思い出の一齣である。

戦後初めて、取材で韓国を訪れたのは日韓条約が結ばれた1965年秋であった。まだ朝鮮戦争の傷跡は癒えず、清溪川の兩岸はハコバン(箱房)と呼ばれるバラックが密集する貧民街となり、清流はどぶ川と化していた。

日韓条約で有償・無償8億ドルを得た韓国は、経済再建を急いだ。ハコバンの住民は追い立てられ、濁った清溪川は蓋をされた。その上を高架の自動車道路が走った。韓国も日本と同様に、川と景観を犠牲にして経済発展のための高速道路網を建設したのである。

その高速道路が古くなり、大改修が必要になったとき、李明博氏が清溪川の復元を訴えてソウル市長に当選した。李市長は公約通り、約6千kmの高速道路を撤去、3年の歳月と450億円の費用をかけて清溪川を復活させ、2005年に完工式を行った。

水は自然の流れではなく、人工的に水量を増やして豊かな流れを創り出している。兩岸は遊歩道で、環境に配慮した都市空間として、市民に愛されている。さすがに、現在は洗濯する女性の姿は見かけないが――。

都市の活性化と環境改善をもたらした清溪川の復活は、経済成長優先の社会から落ち着いた成熟社会へという時代の要請にこたえる事業であった。李市長はその後、大統領となり、その末期には人気取りのため、竹島に上陸して日韓関係を悪化させ、国際感覚の欠如を露呈したが、清溪川復元の英断は大いに評価すべき業績であろう。



復活前



復活後

ソウルに出来て、東京に出来ないはずはない。前回のオリンピックで失った日本橋の景観を、もう一度よみがえらせることが出来るかどうか、日本人の成熟度が問われる問題である。もちろん、東京だけの話ではなく、広島も清溪川の復活から学ぶことは多い。

□特別寄稿

広島サッカー・スタジアムに思う

松波計画研究所代表

松波龍一

ウィーン国立歌劇場

ウィーンにある国立歌劇場のホールは、その豪華絢爛さで有名であるが、1, 700席+立ち席560と、スケールもでかい。しかし、ここを訪れてもっと驚くのは、ホールを含む建物自体の巨大さである。

平面図で測ると、1階の床面積だけでその「でかい」ホールの9倍を越える広さである。4階か5階建てらしいので、延床面積でいえば、おそらく20倍は下らないであろう。

そこに、メインホールのほか、大きなステージが3つといくつものリハーサルステージ、200~300人ホールが3つ、バレールーム、ティーサロン、その他諸々の小部屋やロビーがたくさんあって、歌劇場を構成している。それらが寄ってたかって「オペラ」というものを生産し、メインホールはその蛇口のひとつにすぎないのである。

この歌劇場は、豪華さや客席数ではなく、そのバックヤードの広さが命なのであった。

バックヤード

文化というものは、予想外に地域との関わりが深く、それ自体が経済やインフラを含めて大きな地域開発効果を発揮するものである。そのためには、多様な機能をもつバックヤードによって厚みと広がりを得られるようになっていくことが重要だ。

サッカーを観戦するスタジアムがひとつあれば、それでサッカー文化が育つというわけでもないと思う。

サッカー・スタジアム

正直に言えば、わたし個人はサッカーにはそれほど興味がない。とはいえ、サッカーが好きでしょうがないという人たちが、広島にもちゃんとしたサッカー・スタジアムを作ろうというのは、慶賀すべきことだと思う。

その際、まず議論してほしいのは、広島でサッカー文化を盛り上げていくために何が必要なのかということであり、それをわたしの一般的な市民にも理解できるように、丁寧に主張してほしい。

あえていえば、スタジアム本体の収容人員とか、年間の稼動日数などというのは枝葉末節のことがらである。ましてや、どこに作るのかということは、スタジアムやそのバックヤードの複合性をどう考えるのか、地域開発効果をあげるためのシナリオをどう描くのか、というような諸般の事情で決まるのであって、けっして場所選びが先行するわけではない。

そういう本末転倒の議論の運び方では、ウィーンの国立歌劇場は成立しなかっただろう。

世界一のスタジアムを

それから、できれば世界一のスタジアムを作ろう、というような夢を語ってもらえるとありがたい。

規模とか、豪華さとか、そういうことではない。では、何をもって世界一を目指すのか、ということであれこれ言い合うような機会があれば、さぞかし前向きな場になるだろう。たとえば、端正な美しさというのでもよいし、あるいは驚くほどの集積度とか、周辺の自然のすばらしさとか、用途の多様さとか、目の覚めるような眺望とか、充実したサッカー教育とか・・・

そういう発想を培っていくことが、実は地方都市の主体性、つまり地域主権を発揮していくのであって、ナショナル・スタンダードに照らして身の程を選ぶとか、国庫補助をあてにできるような内容を賢く工夫するとかということが、広島の誇りに結びつくわけではない。



ひろしまのまちづくりの動き

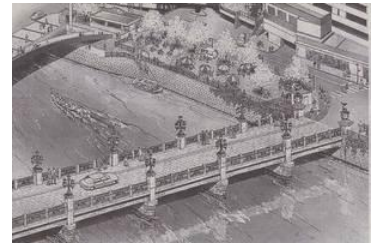
○猿猴橋の復元！

広島市の被爆70周年記念事業として被爆した猿猴橋を建設当時の姿に復元することが決まっており、今年度設計して、来年度完成する予定。戦時中に金属供出のため装飾品が外され、原爆で一部損壊したが、壊滅的な被害は免れて今の姿となる。

四隅の親柱には地球儀の上に羽を広げたブロンズ製の鷲、橋脚の石柱には電飾灯、欄干には桃を奪い合う2匹の猿の装飾が施されていた。2008年に地域住民による「猿猴橋復元の会」が発足し、大正時代の姿に戻すための募金活動を始めていた。

広島県と広島市は駅前大橋から猿猴橋までのエリアを「水都」にふさわしい水辺空間づくりに合意。市は猿猴橋の復元他、河岸には芝生広場やウッドデッキを整備。県は川底を浚渫して川の水質を浄化し、水上タクシー用に護岸を改修する。

広島駅南口B、Cブロックの再開発と猿猴川沿岸の整備により広島市の玄関口に新名所が誕生する。（編集委員 瀧口信二）



猿猴橋周辺の整備イメージ
中国新聞（2014.11.5）より



大正末期の姿

○広島市の復興の軌跡（第10回）・被爆建物「旧帝国銀行広島支店（アンデルセン）」

広島市中心部一番の繁華街、本通西詰に瀟灑な建物、広島アンデルセンがあります。道路に面して白いベンチと鉢植えの花が置かれており、店内からは行き交う人を眺めながら食事をすることができます。しかし、恐らく通行客もお店のお客さんもこの建物の案内プレートを目にしない限り、今や、この建物が被爆建物であると知る人は少ないのではないのでしょうか？

戦前の姿

この建物の前身は日本最初の私立銀行、旧三井銀行広島支店です。旧日本銀行広島支店など多くの銀行建築を残している長野宇平治の設計により1925年（大正14年）に建てられました。竣工当時の外観は左右対称、正面玄関には上下異なる柱頭がついた丸い石柱、三連の矩形窓、正円アーチなどルネッサンス風の美しい、鉄筋コンクリート造2階建てでした。1943年には三井と第一銀行が合併して帝国銀行広島支店となりました。



被爆の状況

1945年8月6日、原爆投下時、爆心地から360mのこの建物には宿直行員6人、女子行員12～13人がいましたが生存者は確認されていません。建物自体は大きな吹き抜けがマイナスに作用し、屋根の大部分が崩れ落ち、内部は劫火に見舞われました。屋根を支えていた梁や柱は鉄骨が露出して垂れ下がったり、亀裂が生じていました。ただ、アメリカ製の大金庫は被爆に耐え、現金や帳簿類は無事でした。



戦後の歩み

帝国銀行は被爆直後から日銀などで仮店舗営業したのち1950年5月、修復を終えたこの店舗での営業を再開しています。

建物自体が著しく破壊されたため、修復は難しいのではないかとわれ、一時、ヒロシマの象徴として産業奨励館を残すか、帝国銀行の廃墟を保存するかの議論も交わされたようです。

「廃墟を保存」とまで議論された建物は山下寿郎設計事務所の修復計画、藤田組施工で見事に蘇りました。具体的には旧来の柱は全て撤去して新たに8本の独立柱を設け、1階の床と2

階のギャラリーを撤去、吹き抜けを縮小して2階の床を柱と関連させて新設しました。

1954年に行名が三井銀行に戻り、1962年まで営業ののち、三井は新店舗に移転、この建物は他の金融機関の仮店舗として使われました。

広島アンデルセンオープン

1967年、タカキペーカリーが所有者である三井銀行からこの建物を買い取り、今日に至っているのですが、取得にあたってタカキの創業者・高木俊介夫妻は渡欧、ローマで菓子メーカーが歴史的な建物を現代的な感覚で上手く利用し、古いものを大切に生かし、その雰囲気の中から新しいものを育てていることに感動。高木夫妻は古い建物をそのまま引き継いで、北欧調の「アンデルセン」を創ることを決意、2階の吹き抜け部分はレストランとして利用、被爆に耐えた金庫室は扉を外し、パン製造の冷蔵庫とするなど、古い建物を生かす形で「広島アンデルセン」がオープンしました。

その後、敷地南側に新館建設、旧館の耐震補強工事など数度の改修工事を経て今日に至っています。特に2001年、被爆建物である旧館の改装工事では総工費1億5000万円掛けて、柱46本に補強用の鉄板を巻き、岩綿を吹き付ける工法で建物の維持に注力したことは特筆に値します。

アンデルセングループは2018年に創業70周年を迎えます。その時期に合わせて広島アンデルセンのリニューアルを計画しており、旧館部分(被爆建物)を取り壊すか耐震性を高めて改築・存続するか、検討が進められていますが、建物をそのまま残し現在の耐震基準に合う改築を行うことは構造上やコスト面からみて厳しい、とみられています。いずれにしても、2015年3月頃を目途に方向性が示される予定です。



オープン時



現在

* (主な参考文献及び掲載写真) 広島アンデルセンのHP 等

(編集委員 三宅恭次)

□ほっとコーナー

『ヨガの風景』

細見 恵 (アトリエトライアウト代表)

昨年の夏からヨガを習い始めた。そろそろ半年になるが、まだ習うというより言われる通りに呼吸し身体を動かしていると言った方が良い感じではある。ヨガはずっと前に一度行って以来で、鏡に向かって大勢でやるのはちょっとと思っていた。後ろの方でちょこちょこやっていたら「ハイ」と振り返って一番前になって慌てたというエアロビ体験を思い出してしまう。

それが、マンツーマンで時間は相談でやってくださるというので、重たい腰が上がった次第である。最初に自分に課したのは、無理に覚えなくてリラックスすることである。やり始めて感じたのは全てが大丈夫だったということで、呼吸と身体の動きを集中し、緩急をつけて行なうので、きついポーズをしても翌日筋肉痛ということがない。最後のシャバサナ(屍のポーズ)の5分は、眠っているのかいないのかわからないうちに終わり、身体がスーッとさっぱりした感覚が残る。無理なく続けられている。

先日建築見学ツアーで立寄ったあるホテルのラウンジで、若い女性が2人でヨガをやっているのを見かけた。夕焼けの海に向かって広がったウッドデッキ・ラウンジで、お茶を飲んだり本を読んだりする人々の様々な動きの中で、違和感なくヨガの動作が溶け込んでいた。いつか自ら身体の要求する動きがわかるようになればと思っている。



広橋先生のヨガのしつらえ
(翠のヨガマット)

○「時代を語り建築を語る会（第7回）」報告 語り人：身延典子氏 ～明治の広島～広島はいかに変容したか～

札幌から東京経由で広島に定住し、広島で出会った頼山陽に新たな光を当てた作家・見延氏が、他都市から見た広島、時代の中で変容してきた広島、特に明治の広島を中心に語る。

主催：時代を語り建築を語る実行委員会（代表：石丸紀興）
日時：2014年11月28日、場所：まちづくり市民交流プラザ

略歴：1955年札幌市生まれ、1978年早稲田大文学部卒、同年「もう頼づえをつかない」刊行、1981年から広島在住、2008年「頼山陽」で新田次郎文学賞他受賞、2014年新刊「竈さらえ」

☆ 江戸から明治へ、軍都としての広島

・頼山陽とその弟子周辺の資料を調べていくと、広島は軍都になっていったという結論に達する。幕末から明治維新にかけて、既に広島には鎮台（後に師団）が置かれ、戦の前線基地として位置づけられた。決定打は、明治27年に日清戦争が始まり、広島に大本営が開設され、すべての兵や物資が宇品から輸送された。

・戦争は一時的に景気をよくする。広島も人が集まり、その恩恵に預かっている。軍都の話をするとう煙たがられるが、事実としてとらえておく必要がある。



☆ 比治山について

・比治山に頼山陽文徳殿があり、祀られているが、なぜ死後にもてはやされるようになったか疑問を感じていた。彼の著書「日本外史」が幕末・明治に脚光を浴びて、新政府は天皇制の思想教育に利用したのではないか。

・比治山は花見の名所だが、幕末から明治・大正・昭和の戦争で亡くなられた方が葬られた陸軍墓地がある。ほとんど忘れられた存在だが、もっと光を当てて、戦争の怖さ、平和の有難さを伝える場にできないか。きれいな平和公園よりも戦争そのものを見つめさせた方が子供に与えるインパクトは大きいと思う。

・比治山は広島の歴史を見ている場所である。現代美術館やまんが図書館があり、博物館を建設する構想もあったようだが、貝塚・陸軍墓地・放影研（旧ABC）等があり、比治山そのものが博物館と言える。

☆ 広島のみちについて

・歴史のないみちは面白みに欠ける。広島には歴史があるのだから、被爆以前の歴史も紐解き、広島城を中心に据えたまちづくりがあってもよいのではないか。

・郷土の歴史が子供に教えられていないので、教育が大事と思う。

☆ 安芸と備後の関係

・安芸は外様の浅野藩、備後は譜代の阿部藩。幕末から維新にかけての長州征伐や戊辰戦争等を通じて味方になったり、敵になったり。結局、新政府になって両藩が合併して広島県となり、広島市に県庁が置かれる。薩長が負けていれば、福山県広島市となっていた。

☆ 聴講者からの意見等

・森保洋之氏（広工大名誉教授）・・・江戸を踏まえて明治・大正にも元気な営みのまちがあったはず。例えば、料理屋等の5階建楼閣。その元気を探し出し、紡いでいきたい。

・大田晋氏（元広島市助役）・・・市民の寄付により広大を誘致する元気があった。被爆を声高に叫んで国からの援助を期待する受け身体質から脱皮しなければ元気になれない。

・山田康氏（元広島市助役）・・・広島は上から軍都にさせられたのであり、市民の側に立って考えてみる必要がある。市民が軍都を望んだとは思わない。

<コメント>

歴史的な事実を検証しながら小説を紡いでいく文学者のクールな視点は新鮮であり、説得力がある。明治の日清戦争の頃まで執筆が進んでいるようだが、広島の大正・昭和の戦前までたどり着いてもらえば、まちづくりを考える上での貴重な財産となろう。

（編集委員 瀧口信二）

○人物登場：石丸良道氏（セトラひろしま副理事長）

「本当に私でいいの？」と少し当惑。若狭理事長とタッグを組んで実務をこなしてきた石丸さんの苦労話を聞きたいということで登場を願う。最初は多少緊張気味だったが、得意の芸術論になると熱を帯びてきた。



略歴：1951年広島生まれ、九州芸術工科大学中退、5年間スペイン在住、1976年帰国、2003年セトラひろしま副理事長、2014年中振連事務局長

☆ これまでの軌跡

生まれ育ちは広島で高校卒業後、新設の九州芸術工科大学へ。70年代前半は大学紛争の余韻が残る中、当時流行りのドロップアウトしてヨーロッパへ。物価が安く生活しやすいスペインでアパート暮らしを始め、独学で絵を習いながら5年間過ごす。

日本に帰ってきて生活に馴染めず、元祖フリーターとしていろいろアルバイトしながら今に至り、セトラの活動のためにアルバイトしていた感がある。昨年4月にやっと定職につく。

☆ 大イノコ祭りについて

1990年にスタートした「大イノコ祭り」のきっかけは、当時発足した中国地域づくり交流会のテーマの一つとして「手作り公園研究会」を加藤新氏が立上げ、リニューアル時期と重なった袋町公園でなにか祭りをやろうという話になる。馴染みのある亥の子祭りを現代風にアレンジしたのが今の大イノコ。1回目は研究会が主催したが、2回目以降は並木通り商店街が中心となって実施。7回続いたが、バブルがはじけて寄付も集まらなくなり中止。何のための祭りなのか、挫折を味わいながらも、祭りが自分の主テーマとなる。

アベノミクスの追い風で経産省からの補助金が広島市中央部商店街振興組合連合会（中振連）に認められ、2013年に17年振りに大イノコを復活し、昨年も実施したが、今年は小休止の予定。補助金頼りからの脱却を図らなければ先が見えてこない。

☆ これからの目標は

2006年に岡本太郎の「明日の神話」を旧市民球場跡地に誘致する会が発足したが、その流れを広島文化会議準備会が継承して、エマニュエル・リバ展（2008年）、新藤兼人百年の軌跡（2012年）、等のイベントを実施。また世界に開かれた球場跡地にグローバルな文化が発信できる「明日の広場」を実現させる運動を展開中である。

当面の目標は大イノコ祭りが継続できる環境を作ること。今回祭りを担いたいという若い人たちが「市民の会」を作り、クラウドファンディングに挑戦した。市民の会を大きく育てていけば次なる主催母体になりうる。NPOはテーマや趣味により地域を超えて集まるコミュニティ。地域の地縁を軸としてNPOをうまく結束させれば、「とうかさん」や「えべっさん」のような持続可能なイベントができる。

☆ Co-eX（コ・エックス）とは

祭りやイベント等の企画が好きである。Co-eXとは、コラボレーション（協働）とエクspansion（拡張）の緊張感あるセッションの形。ヒロシマが要請する未来の地球文化の表現スタイルと考えている。異ジャンルのアーティストが場を共有し、対立しながら即興的に表現していく。演出的な上からの視点ではなく、相手の反応を見ながらみんなで作っていく。

祭りも演劇や公演と違って、準備はするけどぶっつけ本番なのでCo-eXに近い。まちづくりもいろいろな要素が組み合わさっているので、Co-eXといえる。Co-eXの実験が好き。

☆ 「無いという過去」を持つ広島

1945. 8. 6の「ヒロシマ」は人類史の特異点。新しく人間の条件が変わったという意味で「グラウンド・ゼロ（基点）」であり、歴史の起源である。「ゼロ」は「無い」という存在だから、広島には「無いという過去」がある。この過去に対峙しなければいけないが、引きずり回されてもいけない。

コメント 独特の芸術論、歴史観は長年の体験の中から培われたものであろう。アートとまちづくりの融合にチャレンジし続ける姿にエールを送りたい。

聞き手：編集委員 前岡智之、瀧口信二（文責）

○アイデアコンペの中から提案！

2011年に行った広島市中央公園アイデアコンペの結果が公表され、後日、特別審査員と入賞者が集まって公開討論会が催された。その中で発言された特別審査員の見解を紹介して、アイデアコンペからの提案シリーズを終了とする。

・平岡敬氏（審査委員長）

- ・広島平和記念都市建設法（以下、平和都市法）の目指す都市像を念頭に置いて中央公園を考える。ただ憩うだけではなく、生きる喜びが実感できる場、平和を実現するための活動の場にして、平和で飯が食えるようにするのがよい。
- ・中央公園の将来の姿は、これしかないというのではなく、変わってもよい。市民の意識が町を作っていくので、市民の意識を高めていくのに今回の試みが一助になればよい。



・石丸紀興氏（審査員）

- ・計画を提案することは、自分が歴史に参加したという思いを醸成することが今回のコンペで分かった。中央公園と平和公園のつなぎ方、水辺の使い方、軸線の扱い方等、多くのストックを得た。
- ・広島の平和復興の物語から言えば、平和都市法の果たした役割は大きく、物語を完結させないで、これからも作っていく必要がある。その物語を都市づくりに結実していき、今生きている人達はその歴史に関わっていく必要がある。



・ナスリーン・アジミ氏（審査員）

- ・広島は「祈りの場」、「平和発信の地」、「賑わいの場」等、すべての要素がそろっている。小さなことを変えるだけでも、中央公園と平和公園をつなぎ、一体感を更に高めることができる。中央公園も球場跡地もこれから姿を変えることにより、全体的なまとまりを作ることができる。
- ・現在そして未来の世代のために平和のメッセージを伝える建築の力を過小評価してはいけない。広島は戦後、賢明な建築家とその価値がわかる政治家のお陰で都市の発展を遂げてきた。広島は世界の象徴的存在であることを市民が一番わかっていると思うので、そのために参加してもらいたい。



・高東博視氏（審査員）

- ・平和都市法（第1条）では「恒久平和実現の理想の象徴として、広島市を平和記念都市として建設する」とあるが、平和記念都市とはどういうものか一切条文にない。その実現に向けて広島市民が具体的に構想し、完成させて行かなければならない。
- ・このため広島市民は常日頃、理想の象徴であることを自覚し、不断の努力を積み重ねていかねばならない。そうして将来にわたり平和都市法を活かしていくことがヒロシマの使命であろう。



・前岡智之氏（事務局）

- ・広島は被爆という唯一無二の体験をし、市民の総意により平和都市法を成立させ、復興にとりかかった。広島は日本中、世界中から復興のための応援を受け、その恩を返す時期が来ている。誰に返すか、どうやって返すかが課題である。
- ・祈り、平和発信、賑わい等のコンセプトがあるが、それらのデザインは変化してもよい。ただ忘れてはならないのは、多くの人から応援をいただき、平和を表現する町を広島は持てたこと。それ故に、これから平和の町を作る人や平和を表現する人には、是非広島に来てもらって、平和を表現する町を知ってもらう仕組みが中央公園の将来の姿にあるべきではないか。



（編集委員 瀧口信二）

○こまちなみシリーズ⑤

金沢市は「こまちなみ保存条例」を制定し、「まちの歴史を色濃く残した、ちょっとした良い町並み」を「こまちなみ」として守り、育て、その雰囲気を生かした風格あるまちづくりを進めている。そこで、これに倣って、広島における残しておきたい「こまちなみ」を探訪し、シリーズで紹介する。

廿日市市・地御前の古い町並み

～厳島神社の外宮・地御前神社の門前町～

地御前神社から広島方面に、ＪＲの踏切を渡って地御前小学校を過ぎると古い町並みが始まる。町屋特有の袖壁などを持つ平入り２階の家屋が多く、僅か１００ｍ程度であるが、今も昔ながらの景観が部分的に残っている。

特に近年は古い町屋が姿を消し、建替や駐車場などへの転用が多くなったと聞く。本陣や津和野藩・船宿があった「廿日市宿」の古い面影が薄くなっているだけに、廿日市市に今も残る貴重な町並みといえよう。

<門前町の成り立ち>

厳島は島全体が聖地であったので、対岸に厳島遥拝と祭祀のために建造物が建てられた。そこから発展したのが厳島神社の外宮と称される地御前神社である。本殿は仁安３年（１１６８）に建立され、宝暦１０年（１７６０）に再建されて現在に至る。地御前の町屋は地御前神社の門前町として発展していった。

旧西国街道は廿日市宿から宮内串戸を経て山沿いに大野に至り、海沿いの地御前は通っていなかった。このため地御前神社へは村道「地ノ御前道」を利用し、道筋には町屋が軒を並べ門前町が賑わった。

この「地ノ御前道」に沿って名所・旧跡等も沢山あり、興味深い町並み探索が出来る。旧街道の道標、正行寺の不動明王坐像（室町時代作）、西向寺の蓮華松（樹齢３００年）、小林千古生誕地の碑（明治の洋画家）、大歳神社（地御前の氏神）など多数。また、宮島の管弦祭が年々寂れてゆくなか、地御前神社の管弦祭は大変賑やかで人出も多く、地域の祭りとして定着してきたという。

<町並みの保存活用>

地元公民館を拠点とした「地御前郷土文化保存会」という市民活動があるが、町並みの保存活動の取り組みはない。

廿日市は厳島神社と密接な関係を持ち、西国街道に面した宿場町及び港町として、近世では佐伯郡の中核的存在として発展してきた。このため歴史的文化資源が極めて多い。宮島に止まることなく、これらの優れた資源の保存活用について廿日市市（歴史まちなみ推進室）のより積極的な取り組みを期待する。



地御前神社・門前町の街並み



古い平入り２階建て町屋



西向寺と蓮華松



江戸時代の地御前神社
「厳島図会」より

＊門前町へは車の場合、地御前神社・鳥居前に駐車して東に歩く。広電宮島線「地御前駅」からはＪＲ線路を渡って徒歩にて直ぐ。

＊門前町から約 200m東の地御前市民センター（公民館）に立ち寄り「地御前史跡MAP」（無料）の入手をお勧めする。 TEL（0829）36－2360

（編集委員 高東博視）

○読者からの投稿その1

2014. 8. 20 豪雨土砂災害に思う

ダブルスネットワーク(株) 若本修治

戦後郊外の山裾に開発された住宅地が、このたびの豪雨土砂災害で大きな被害を受けた。広島市は、出来るだけ郊外から都市中心部に集まって住んでもらう『コンパクトシティ』構想を掲げ「都市の密度を高める」政策を進めようとしている。しかしながら現状は、民間企業による団地開発や住宅供給という「経済活動」に規制を掛けられず、今回土砂災害に見舞われた山裾だけでなく、さらに高台の山を削って、新しい宅地開発が行われているのが実態だ。

民有地、個人の所有する土地に規制を行うのは、公共の福祉に寄与するという大義名分が必要だ。単に「コンパクトシティ化を進めるため」では、通常なかなか住民は納得しない。しかし広島市では昭和に入ってから区画整理以外の災害防止のために2つの大きな立ち退きが行われている。1つは治水のために行われた『太田川放水路』。そしてもう1つは火災延焼を防ぐ目的で100mの緑地を設けた『平和大通り』。元々土地を所有していた住民からは大反対されたものの、今や平和大通りは広島市の都市景観になくしてはならぬものとなり、太田川放水路も含めて存在を否定する人はいない。災害から人を守る『バッファゾーン』という存在が、都市に水や緑を提供し、特長ある都市景観を形成している。

周辺の住民の目が届きにくいような住宅地で、大きな開口部を設けながら防犯対策をするのと同様、犯罪者や自然災害は人が考えた「小手先の対策」などは悠々と乗り越え、想定外の被害を与えるのが世の常だ。そして同じ場所に同じ災害は発生せず、人の記憶が薄れた頃に襲ってくる。だからこそ、物理的に被災しないような『バッファゾーン』を設けながら都市景観も整備していく、人口減少時代を踏まえた新しい都市づくりが望まれるのではないだろうか。

○読者からの投稿その2

蘇えらせよう「平和の鐘」の響き

平和の鐘を蘇えらせる会 高東博視

中央公園のハノーバー庭園近くにある「平和の鐘」(Peace Bell)をご存知でしょうか？

1949年(昭和24年)、当時の広島銅合金鑄造会が、原爆犠牲者の鎮魂と平和の願いをこめて焼け跡から集めた金属を鑄込んで作り、広島市に寄贈しました。

口径1.2m、高さ1.4m、重さ800kg。「No more Hiroshimas」の英文と平和の象徴の鳩の羽ばたきが刻み込まれています。同年8月6日の第3回平和祭(現在の平和記念式典)に打ち鳴らされた後、現在地の鉄骨の鐘楼に据えられました。しかし、その後この「平和の鐘」は式典では全く鳴らされていません。

毎年8月6日の平和記念式典で「平和の鐘」が打ち鳴らされるが、これは1947年(昭和22年)8月、第1回広島平和祭で初めて鳴らされました。この初代の「平和の鐘」は1948年(昭和23年)第2回式典でも鳴らされ、現在の平和公園がある中島町の北端の「平和塔」に吊るされていました。ところが朝鮮戦争による金属需要の増加により1951年(昭和26年)3月盗難に遭いました。

現在使われている「平和の鐘」は、1967年(昭和42年)建立の五代目にあたり、香取正彦氏(鑄金工芸作家・人間国宝・故人)から寄贈されたものです。なお、三代目及び四代目の「平和の鐘」は、市内の寺から借受けて式典に使用されました。

広島銅合金鑄造会から寄贈された鐘は二代目にあたり、現存する最古の「平和の鐘」であって、被爆金属を溶かして鑄造された大変由緒ある鐘です。また、1949年(昭和24年)



中央公園に現存する
二代目「平和の鐘」
ほぼ丹下軸線上に配置
2014年12月筆者撮影

広島平和記念都市建設法公布を記念して、同年に広島市へ寄贈されたと云われています。

第3回平和祭で一度だけ打ち鳴らされた二代目「平和の鐘」の響きを、被爆70周年記念式典にあたり、65年ぶりに蘇えらせた。併せて、鋳物師としてこの「平和の鐘」の鋳造に係わった、被爆者（故人）の方々の切なる願いを是非とも実現したい。

「平和の鐘」の略歴

初代	1947年～1948年	1951年3月盗難
二代	1949年	寄贈、中央公園に現存
(1950年：式典中止)		
(1951年：式典再開するも鐘を不使用)		
三代	1952年～1964年	光元寺から借受け
四代	1965年～1966年	観音寺から借受け
五代	1967年～現在	寄贈、平和記念館に保管

※1949年式典のみ、現在の中央公園の場所で開催された

○お知らせ：「時代を語り建築を語る会(第8回)」開催

- ・語り人：石丸紀興氏（広島諸事・地域再生研究所主宰）
- ・テーマ：広島大規模土砂災害から～広島の各種計画を検証する～
- ・開催日時：2015年2月28日（土）13：30～16：30
- ・会場：広島市まちづくり市民交流プラザ、会議室A・B（南棟3階）
- ・会費：1000円（資料費・会場費）、学生・院生は無料
- ・参加申込の連絡先：広島諸事・地域再生研究所
電話/FAX：082-223-7226、メールアドレス：nisimar5@hotmail.com
- ・主催：時代を語り建築を語る会実行委員会（代表 石丸紀興）
- ・共催：広島アイデアコンペ実行委員会

□編集後記

新年あけましておめでとうございます。皆さんにとりましてとっても良い年（都市）になりますよう！ひろしまも復興70年を迎えました。これまでを振り返り、今からを考える時、このメルマガを通じて出会えた多くの方々とどこかでお会いして、たくさん語り合えたらいいなあと夢描いています。そうだ！今年は、旧広島市民球場跡地を利用して市内各地区で行われているまちづくり活動団体が一堂に会して"まちづくりフェスティバル"をやろう！その時は、子どもたちにも集まってもらってひろしまの明日を描いてもらおう！などなど夢は広がります。

（編集委員 前岡智之）

***メルマガを読まれての感想や質問及びひろしまのまちづくりについて皆さんの自由な提案・意見をお聞かせください！**

（投稿は500字程度以内でお願いします）

編集委員

石丸紀興	広島諸事・地域再生研究所主宰
高東博視	心豊かな家庭環境をつくる広島21理事
瀧口信二	広島アイデアコンペ実行委員会事務局
通谷 章	ガリバープロダクツ代表
前岡智之	中国セントラルコンサルタント代表
三宅恭次	元中国放送役員